
駄菓子日和

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駄菓子日和

【Nコード】

N6648P

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

駄菓子屋さんを見つけた私は、小学一年生の誕生日に万引きしたことを思い出す。

今時珍しいその駄菓子屋さんを見つけたとき、私は思わず辺りをキョロキョロと確認してしまった。昔に戻ってしまったのかと思つて。

懐かしい。１０円や２０円の小さなお菓子。体に悪そうな色をした水あめ、チューブゼリー、歯でかじって開けるジュース。

当たりのついたラーメン、ラムネ、色とりどりのグミ。当たったことのないチョコレート。

笛ラムネ、輪っかチョコ、タマゴボーロ。

おまけのカードが一枚入っているスナック菓子。

狭い店内を見渡すと、古い思い出が蘇ってくる。

たぶん。夏。

どうして小さい頃の近所の駄菓子屋を思い出す時、決まって季節は夏なのだろう。

分らないけど、蝉が鳴いてたような気がする。夏。

小学校に上がる時、引越してきた家の近くに小さな駄菓子屋があった。

お母さんもお父さんも懐かしがってたまに訪れていたその店は、小さいおばあさんがいつも大きな音でテレビを見ているようなお店だった。

透明なプラスチックケースの中にはキラキラ輝いて見えるグミが沢山詰まっていて、小さい私は箱ごと欲しくて堪らなかった。

大人にしてみれば、箱ごと買っても大した額ではなかったのだと思う。

だけど、お母さんとお父さんは、いつも二つや三つずつ色々な種類の駄菓子を取ってはおばあさんと呼んで買っていた。

特にあたりつきと書いてあるグミを開けると、私以上に二人は楽しそうだった。

そのグミは五個に一個は当たって、私はその度に急いで駄菓子屋に走った。

小学校に通っていても友達が全然出来なかった私は、その駄菓子屋で友達を作った。

最初は親に貰ったお小遣いで、満足していた。

週200円のお小遣いでは少ししか駄菓子を買えなかったけど、全然良かった。

でも友達が増えて、そうして遊ぶうちにお小遣いが足りないと思うようになった。

友達といつも「お金ないね」と言って公園のブランコやシーソーに乗った。

お菓子があつたらもつと楽しくなるのに。と思いながら。

学校の帰りに、駄菓子屋さんの前を通るたびに、お金とお菓子の事を思った。

そうして、誰かが言い出した「万引き」に憧れるようになったのだ。

「上級生は万引きしてるんだって」

誰かが言い出してからは、私達はいけない事と思いつつも憧れるようになった。

「バレないって。オバちゃんいつもテレビ見てるから」

大きな音でテレビを見ている駄菓子屋のおばあちゃんを盗み見ては、盗んでも大丈夫そうだと納得した。

「ねえ、夏休みになったら、やってみようよ」

そう、誰かが言った。

万引き決行日は八月生まれの私の誕生日になった。

小学校に上がってから初めての誕生日。

一気に大人になった気がした。

いつも一緒に遊んでいる、アッコちゃんとリツちゃんには内緒。

あの二人は二年生だけど、大人に言いつけるから。

「大丈夫だよ。みんなやってるって」

キラキラしたグミを両手いっぱいに握んだとき、私は一瞬頭に冷水を浴びたように感じた。

駄菓子屋さんに入る前、グミを目の前にした時までは高揚感で火照っていた頬が、頭が、一瞬で氷のように冷たく重く感じた。

「あ……」

私は言葉にならない悲鳴を上げ、走った。

皆が「待つて」と私を追いかけるのを背中に感じた。

待つて 待たない 待つてよ ヤダ 待つてたら 来ないで！！
学校の校庭まで走って、両手に何も持つていないことに気がついた。
駄菓子屋を出たときは両手に溢れるほどグミを持っていたはずなのに。

いつもは子供達であふれている校庭には誰もいなかった。

もしかしたら、記憶が違うのかもしれない。

上級生が、サッカーゴールやドッチボールのコートを陣取っていつも下級生は校庭で遊べなかったのに、どうしてこの日は誰もいなかったのだろう。

思い返すとやっぱり可笑しな事ばかりだ。

私を追いかけていたはずの友達もいない、一人ぼっちの校庭。

ポツンとサッカーボールが転がっていて、私は拾って抱きしめた。
そして、泣いた。

「どうしたの？」

夕日に彩られていた校庭の真ん中で、私が泣いていると、上級生に

声を掛けられた。

顔は逆光で分からなかったけど、背が高く、優しい声をした男の子。

私は泣きながらその子の手を握った。

（いつの間にか、サッカーボールは無くなっていった）

後になって、その子は近所に住んでいる6年生の男の子だと分かったが、その時はただ寂しくて、心細くて、男の子が側にいるだけで私は安心しきっていた。

駄菓子屋さんのおばあさんに事情を説明して謝った。

男の子はずっと一緒にいてくれた。

おばあさんは謝りにきた私を「偉いねえ」と褒めてくれた。

私の誕生日はそうして終わった。

たぶん毎年恒例のケーキやプレゼントもあったと思うが、私にはその年、親とどうやって誕生日を過ごしたのか覚えていない。

覚えているのは、後日友達と会ったとき、友達が私が落としたグミを友達同士で全て食べてしまっていたことが分かり、とても怒ったこと。

でもいつの間にか仲直りしていたこと（卒業アルバムにはしっかりと友達と私で仲良く写っている）

そして、男の子は私立の中学校へ通うことになり、会えなくなってしまうこと。

私の初恋だったのかもしれない。

今でも男の子の事を思い出しては、甘酸っぱいような気持ちになるのだから。

「わあ！ 青いー！」

狭い店内を出ると外は雲ひとつ無い青空だった。

風は冷たく耳が痛いほどだったが、日の光が暖かった。
あの駄菓子屋のおばあちゃんは元気かな。

あの男の子はどうしているだろう。

そう思いながら、私は懐かしい駄菓子屋さんを後にする。
もちろん、沢山の駄菓子を手に持って。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

駄菓子大好き。

最近、映画を観るついでに駄菓子屋さんに行きました。

デパートの中の駄菓子屋さん。

懐かしかったので、駄菓子に関するお話書けなかなと思って書いてみました。

すもものような甘酸っぱい思い出。

皆さんにはありますか。

ご感想・ご指摘、ありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6648p/>

駄菓子日和

2010年12月30日22時05分発行